

平成 27 年度 「甲斐のくろまる」の栽培管理の手引き

果樹食品流通課、果樹試験場

「甲斐のくろまる（「ピオーネ」×「山梨 46 号（巨峰×巨峰）」）は、早生で着色が良く、食味が優れる黒色系四倍体品種であり、盆前出荷が可能な地域への導入が期待されている。栽培管理については、これまで果樹試験場の栽培・研究等から明らかになった特性に応じ、次の点に留意する。

○「甲斐のくろまる」の留意すべき特性

若木のうちは、粗着果房になりやすい。

これは 年により開花前に落蕾が発生すること、巨峰より花穂が小さく花蕾数が少ないことなどによると考えられる。樹齢が若いと特にこの傾向が強くなることから、以下のポイントに留意して着粒の確保を最重点に管理を行う。



写真 1 甲斐のくろまるの花穂
(樹齢5年生)

巨峰の花穂
(樹齢6年生)

◎高品質安定生産のための重要ポイント 1

- ①樹勢に応じた剪定・新梢の発芽率の向上により、樹勢の適正化を図る
- ②土壤の乾燥による落蕾が発生しないように、定期的なかん水に努める

○整枝・剪定

幼木のうちは樹勢が強いが、結実が始まると樹勢が落ちついてくる傾向が見られるので、樹勢に応じ切り詰め程度を調整する。基本的な整枝や切り返し程度は、種なし巨峰・ピオーネに準じる。

○発芽率の向上

若木のうちは樹勢が強く、結果母枝が太くなるので、発芽率向上のため芽キズ処理を行う。特に、徒長的に伸長した結果母枝には、シアナミド剤の散布（ヒットα10 または CX-10、10～15 倍、150～200 リットル/10a）または塗布を2月に行う。

○かん水

土壤の乾燥による落蕾などが発生しないように、春先から定期的なかん水を行う。生育期全般を通して、土壤が極端に乾燥しないように定期的なかん水に努める。

○芽かき・新梢誘引

芽かきは次のとおり3回程度に分けて実施する。

1 回目は、展葉2～3枚時に不定芽、副芽、基芽を中心に除去する。

2 回目は、展葉5～6枚時に新梢の勢力を揃えるように、芽かきを行う。

3 回目は、展葉7～8枚時に誘引と合わせて、混み合っている部分の新梢、結果枝基部で徒長的に生育している新梢等を除去する。

○花穂発育促進のためのフルメット散布処理

花穂が小さい場合は、花蕾数が少なくなり着粒確保が難しくなる。花穂の発育促進(開花時の子房の肥大に効果有)を図るため、展葉6～8枚時にフルメット2ppmをハンドスプレー等で花穂(花房)に散布する。ただし、効果の安定性は未確認のため、今後も検討を続ける。

○ストレプトマイシン剤の処理

無核果率を向上するため、満開2週間前から開花始め期にアグレプト液剤1,000倍を散布する。

○開花前の花穂の整理

開花期に30cm未満の弱い新梢はカラ枝とする。樹勢と新梢の伸長程度に応じ整理する。

◎高品質安定生産のための重要ポイント2

- ①房づくり時の花穂長は4cm以下を厳守する
- ②花ぶるい防止のため、開花始めに新梢先端の未展葉部を摘心する

○房づくり

- ①花蕾数が巨峰より少ないため、整形した花穂が短すぎると着粒数が不足し、長すぎると花穂先端が花振いを起こしやすい傾向があるので、房づくり時の花穂長は4cm以下を厳守する。
- ②房尻を摘むと支梗が横伸びし、密着した円筒形の果房になりにくいいため、摘まない方が良い。
- ③生育旺盛な新梢は、花ぶるい防止のため、開花始め(房づくり時)に新梢先端の未展葉部を摘心する。なお、延長枝は樹冠拡大のため摘心は避ける。

◎高品質安定生産のための重要ポイント3

- ①着粒安定のため、開花始めにフルメット5ppmを花穂(花房)に浸漬する
- ②1回目ジベレリン処理の時期が遅れないように注意する

○着粒安定のためのフルメット処理

着粒安定のため、開花始めに(ほ場内で開花が始まったら)フルメット5ppmを花穂(花房)に浸漬する。

○第1回目ジベレリン処理

第1回目ジベレリン処理は、満開時に実施する。ただし、花冠をかぶったまま内部で開花している果粒が多いので(写真2)、1回目のジベレリン処理が遅れないように注意する(写真2の花穂は処理適期をやや過ぎた状態)。

なお、開花始めに着粒安定のためのフルメット5ppmの処理を行っているため、ジベレリン処理は25ppmの単用処理とする。



写真2 花冠が着いたまま開花を迎えた花穂 (5年生)

◎高品質安定生産のための重要ポイント4

花冠や花カスが残る場合は、1回目ジベレリン処理後に花カス落としを徹底する

○花カス落とし

花冠や雄ずい果粒に残る場合は、サビ果や傷果の原因になるので、1回目ジベレリン処理後に花カス落としを行う。なお、この時期の小果梗は折れやすいので注意する。

○第2回目ジベレリン処理

第2回目ジベレリン処理は、満開10～15日後に実施する。ジベレリン処理は25ppmの単用処理とする。

表1 植調剤の処理時期と濃度

植調剤名	使用目的	使用濃度	使用時期
アグレプト液剤	無種子化	1000倍	満開2週間前～開花始め期
フルメット液剤	着粒安定	5ppm	開花始め(園内で開花が始まったら)
ジベレリン剤(1回目)	無種子化	25ppm	満開時
ジベレリン剤(2回目)	果粒肥大促進	25ppm	満開10～15日後

※花穂が小さい場合は、展葉6～8枚時にフルメット2ppmを花穂(花房)散布する。

表1は、着粒安定に関して現在考えられる植物調節剤の最善の方法である。植物調節剤の処理が4回(最大5回)と多いが、着粒安定についての技術が確立できるまで、上記のような対応が必要と考えられる。

○摘房

第1回目ジベレリン処理から摘粒までに、着粒状況や新梢の勢力を確認しながら、早生の特徴を最大限に活かすために、1新梢1果房を基本に整理する。

○摘粒

- ①実止まり確認後、なるべく早く摘粒を実施する。
- ②早生の特徴を活かすため、目標果房重350～400gの場合、軸長は5～6cm、粒数を25～30粒程度とする。なお、目標果房重500gでの栽培技術は事例不足であり、確立されていない。
- ③基本的には房尻をつかい上部支梗を切り下げて軸長5～6cmに調整するが、房尻が花ぶるいした場合には、房尻を切り上げて軸長5～6cmに調整する。
- ④着粒数が少ない場合は、下向きや上向きの果粒も残し、目標果房重を確保する。

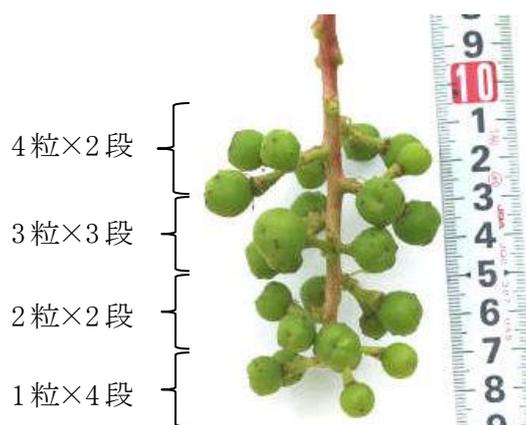


写真3 摘粒後の果房

○収量調節の目安

基本的には、種なし巨峰に準じる。目標収量を10aあたり収量1,200kgとした場合、果房重が350gで3400房/10a、400gで3000房/10aとなる。

◎高品質安定生産のための重要ポイント5

棚面が明るい場合は、クラフト傘等を用いて日焼け防止に努める

○袋かけ、傘かけ

袋は白色袋を用いて、直射日光が当たる部分は日焼け防止のため、袋の上からクラフト傘等をかける。傘のまま管理する場合は、乳白の傘を用いるが、袋の管理と同様に、直射日光が当たる部分は乳白の傘の上にクラフト傘等をかける。

○摘粒終了以降の新梢管理

- ①新梢が混み合い棚面に暗い部分があれば、誘引の見直しや旺盛に伸びている副梢を2～3枚残し切除する。(棚下に2割程度の光が入る明るさが目安)
- ②着色始めを迎えても伸長が止まらない新梢は摘心を実施し、枝の充実を図る。

○収穫の目安

- ①着色先行であるため、食味を確認してから収穫を開始する。
- ②収穫始めの目安は、種なし「紫玉」の山梨県青果物標準出荷規格に準じる。
着色(品種固有の色沢を有し、果梗周辺まで完全に紫黒色に着色)、糖度17.0度以上、pH3.2以上
- ③H26年の果樹試験場(標高:440m)の収穫始めは8月4日であり、甲府の現地モデル園(標高:260m)での収穫始めは7月30日であった。



写真4 目標とする密着果房

○病虫害防除

基本的には種なし巨峰・ピオーネの防除に準じる。

○肥培管理

基肥については、種なし巨峰・ピオーネに準じる。若木で樹勢が非常に強い場合は施肥を控える。

○短梢栽培・ハウス栽培の適応性

短梢栽培やハウス栽培については、事例がなく花穂の着生などが確認できていないため、当面導入は控える。

本資料は、これまでの果樹試験場での試験栽培・研究に基づいて作成したものであり、当面は毎年改訂を行う。なお、本資料は各指導機関の指導を受けたうえで活用して下さい。

問い合わせ先：果樹試験場果樹技術普及部 (0553-22-1921)、JA営農指導課

(平成26年12月作成)